

HOBBIED

藤田 浩介

目次

前書き

コストパフォーマンス

Cost Performance

ゴールデンリーズン

Golden Reason

アンハッピーインフェクション

Unhappy Infection

インフォメーションアンドコミュニケーション

Information and Communication

前書き

ここでは四文文士会のメンバーである駿河リョウウの中学生時代、出海明の小学生時代、秋葉ゆいの高校生時代、生田透の大学生時代の話をします。

四文文士会に四人が集まるまでに起こったそれぞれの物語をお楽しみください。

コストパフォーマンス

Cost Performance

中学一年のとき、俺は同じクラスの生徒からいじめを受けていた……のだと思う。なぜ語尾を濁したのかと言うと、当時の俺は自分がいじめを受けているという感覚がなかった。だが、昨今のマスコミが報じるころになると、大声を出して威嚇するだとか、からかうなどの行為はいじめに該当するらしい。故に、別の生徒たちが俺に対して日々熱心に取り組んでいた事柄は、いじめであったのだろうと今は思う。具体的に何をされたのかと言うと、授業中に消しゴムのカスを投げられたり、私物を盗まれたりするなどであった。

学校は犯罪者のために作られた結果である。ものを他人に投げつけるのは暴行罪である。また私物を盗むのは窃盗罪である。しかしながら、それらの犯罪行為は認知されても、いじめという言葉に変換され、司法の場に向かうことはない。こうして、幼くして最強の犯罪者が誕生してしまうのだ。

当時の俺は無知だったので、自分が犯罪による被害を受けているという意識はなかった。俺の中にたった一つだけあつた心情は「めんどうくさい」だけである。授業中に消しゴムのカスを投げられると、気が散る。下校時、自分の靴がなくなっていると探すのに時間を要する。見つかからない場合は、俺の靴を隠したと予測される生徒の靴を履いて帰る。だが時折、無関係の生徒の靴を履いて帰ってしまうこともあり、全く関係のない他者に迷惑をかけてしまうこともあつた。

俺は他の生徒が日常生活で苦労していない部分で苦労

している。なぜ俺だけがこのようなめんどうくさい物事に対処していかなければならないのか…… 実を言うと、いじめが始まって二ヶ月ほどした時点で俺はその理由を発見していた。

俺の見た目や、普段の発言内容、発言の仕方、振る舞い。それらを総合して判断される、他人から見ると俺の性格というものは「いじめられやすい」それだった。そこから初めに考えつきたいいじめの解決方法は、自分の性格を変更する、ないしあたかも変わったかのように他の生徒に見せる、演技する。そうすれば、いじめという現象は消滅すると思った。

だが俺はそれをしなかった。なぜなら性格の変更もまた、いじめの対処同様にめんどうくさかったからだ。仕方なく、俺はその場しのぎの対策をしばらくは実行していた。例えば、消しゴムのカスを投げつけられることに関しては、むしろどんな状況においても集中力を維持するトレーニングであると言っ意識に変更した。靴を盗まれる現象に関しては、自分の靴箱にはあらかじめ、他の生徒の靴を入れておいて、本当の自分の靴は別の学年、別のクラスの靴箱に避難させておいた。

いじめに対応する毎日を通して、俺は以下の思いを持つようになった。俺は公立中学校における入学者決定方法に疑問を抱いた。入学次の学力試験がなく、縦長のあらゆる社会階級が一堂に会するこの空間は、限られた階級しか教育を受けなかった過去の時代には存在しなかっただろう。俺にくうだらなちよっかいを出す人間は決まっていた。彼らは限られた一日あたりの集中力を学習に割かず、俺の頭に消しゴムを命中させることに割っていた。

この堪え難い空間は義務教育充実の負の産物である。いじめを受けていた当時の俺は、頭のいい学校に行けば、からかい、脅し、窃盗はなくなると信じていた。実際にその予想は正しく、のちの個人的な調査でも、学力偏差値の高い学校ほどいじめの発生数は少なくなる傾向が見られた。

残念ながら、小学生のときの俺はこの傾向を予想できず、入学時に学力試験が課される私立中学などを受験したいと親に申し出てなかった。ただ、中学受験なんてものは子供の意思でするものではなく、親の判断によるところがほとんどなのだから、今の俺は当時の駿河少年を責めることはできない。

兎にも角にも、俺は偏差値の高い高等学校に進学したかった。それ故、期末テストは推薦入試のための内申点を稼ぐ絶好のチャンスであり、万全の準備をしていた。そして一学期の期末試験を迎えた。試験は二日間で行われた。一日目の英語、国語、社会、家庭科、二日目の理科、保健が終わり、残すは昼休み後の数学のみとなった。

数学教諭が回答用紙、問題用紙の順に紙を配り終えた。はじめ！ の声が教室に響く。俺は筆箱から筆記用具を取り出す……

やられた。

俺の筆箱から筆記用具はなくなっていた。絶妙だ。最後の最後、俺が油断した昼休みに、仕掛けてきやがった。

開始から五分間、俺の答案は名前欄すら埋まっていなかった。もちろん、その場しのぎの解決方法はとっくに思いついていた。

「先生、筆記用具をなくしたので貸していただけませんか」

これを言うだけでいい。ただ、今後も二学期中間試験、二学期期末試験、学年末試験、事あるごとにこの状況を作り出されるに違いない。この回答不可能環境の創作者を今ここでぶっ倒す。俺は根本的な解決方法をとりたいんだっ！

自分の性格を変えて、クラスに溶け込む努力は時間を要する。かと言ってその場しのぎの解決策は、少ない手間で実行できるが、効果の持続性が薄いことがここ最近の経験でわかった。俺は少ない労力で長期的な持続効果を持つ解決策を探していた。

答案白紙のまま二十分の時間が経過した。

ふと頭に何か当たった。

振り返ると、窓側の席から消しゴムのカスが飛んでくるのが見えた。

駿河リョウの左手には、いつの間にか青色のシャープペンシルが握られていた。

駿河リョウはシャープペンシルを二回ノックした。

同時に二本の弾丸がペン先から発射される。それらは窃盗罪および暴行罪を犯した幼い犯罪者の両眼に一本ずつ、ぶっ刺さった。

たった二回、シャープペンシルをノックするだけで、回答不可能環境の創作者を失明させて、次回の犯行を困難にした。俺は非常にコストパフォーマンスに優れたいじめの解決策を発明し、実行したのだ。俺は中学卒業後、地元の進学校に通い、その三年後、東京の令和大学文学部に入学する。

ゴールデンリーズン Golden Reason

ノリが合わない。今思えばその言葉で自分に説明する。小学四年生のある日、僕は母親に隣の別の小学校に車で連れて行かれた。その学校の校庭は、僕が通っていた小学校の校庭よりも広く、野球やサッカーをする子供たちの姿が見えた。

「明、今日は野球クラブの入部体験をしてみようか」

母親は車を止めてグラウンドへと足を進めた。その日のうちに、クラブの監督や母親の強い説得を受け、僕は少年野球を週四回放課後と休日にするようになった。

生まれて初めて団体スポーツをする上で、僕は二つの不安を感じていた。一つは競技能力だ。僕はそれまで、スポーツをすることはあまりなかった。学校の休み時間などは、チャイムと同時にボールを持って校庭にかけるところではなく、教室で本を読んだり、あてもなく校舎内をうろちよるとしていた。しかし一つ目の不安に関しては、なんら問題はなかった。最初こそ、慣れない動作やルールの中で、うまく行かない部分もあったが、ひと月もすれば他の生徒と同じかそれ以上の動きをしていたと思う。今思えば、運動会というイベントでも、徒競走で一着になるなど、一定レベルの基礎体力はもちあわせていたようだ。

もう一つの不安は性格である。もしかすると、僕の母親は僕の日々の暮らしぶりを見て、引つ込みがちな僕に不安を抱き、野球クラブへの加入を決断したのかもしれない。こちらに関しては、不安中であつたと思う。僕にとつて野球クラブの活動時間は非常にストレスフルで

あつた。なぜなら、野球クラブにはその土地特有の慣習があつたのだ。

「こーい！ こーい！」

練習中、メンバーは終始この掛け声を発し続けなければならなかった。

こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい、こーい……

練習中、校舎の方からブラスバンド部の演奏が聞こえた。彼らの音楽は一つ一つの音に意味があつた。僕は練習中なんどもブラスバンドの音楽を羨ましく思った。彼らの音楽に耳をすましていると、

「お前、ちゃんとやれよ！ 声出せや！」

僕の方を見て誰かが怒っている。どうしたんだよ。そんな怖い顔して。

後日、怖い顔の彼が、練習でミスをしておとなしくなっているときがあつた。

「声出してこーい！」

僕が試しにその声をかけると

「うるせえよ！」

と彼は怖い顔をした。

自分が怒ることで自分が怒られるのを防ぐ。自己防衛の手段は先制的他者批判だ。

土日はさらにタチの悪い奴らがやって来る。すでに野球クラブを卒業した中学生のOBである。彼らはどんなプレーに対しても「おい！」、「ちゃんとやれよ！」とコールする。プレーに対して、論理的にどこをどう修正すべきかは一切言わない。罵声を浴びせること自体が彼ら

の目的だ。彼らはグラウンド外の人間故、批判の対象に自分たちがなりえないので、自己防衛の手段としてではなく、自身の快樂のためにそれするところが本当に許せなかった。

僕はそんな環境下でありながら、二年間そのクラブを続けていた。どうして、その土地に不適合な僕が二年もの間所属し続けられたのか。理由一つは競技能力の充実である。最初は不安の種だった僕の競技能力はもはや自信へと変貌していた。野球のバットを振る動作や、ボールを投げる動作の仕組みは、その土地特有の掛け声や自己防衛の手段の価値を理解することよりもずっと容易だった。

もう一つ理由がある。僕にはそんな土地でも友人ができた。その友人も僕同様必要などき以外は掛け声を出さなかった。僕はたまに彼の家にお邪魔して、テレビゲームをしたのを覚えている。彼の家には彼の兄がもう使わなくなったテレビゲームがたくさんあり、僕らはその中でもテニスのゲームを好んで遊んだ。

もうすぐ六年生になろうとしていた春休みのことだった。その日は地区大会の三回戦だった。僕は三番センターでその試合に出場していた。試合はこちらのリードした状態で終盤に入っていた。僕の前のバッターだった友人の彼が出塁して、ランナー一塁で僕に回ってきた。僕がバッターボックスに入ったとき、監督からは盗塁のサインが出ていた。しかし友人の彼はサインを見逃してしまい、走ることをしなかった。

「おい、てめえ何やってんだよ！ ぼけっとしてるからだろ！ てめえ、もう交代だよ。もう帰れ！」

球場の視線は、バッターボックスに立っている僕では

なく、ミスをした彼と暴言を吐く男に注がれていた。審判にそのかさされ、僕はグラウンドに向き直り、バットを構えた。背後からは、延々と男の大声が鳴っていた。したがって集中できない。

相手のピッチャーが投球動作に入っていた。彼を怒鳴る男の声は止まない。ピッチャーの指から離れたスピンの効いたボールは、僕の顔の方に向かってくるように見えた。僕はそれを避けようとしなかった。

ゴッソ！

ヘルメットにボールが当たった。正直、全く痛くなかった。背後で男の罵声が消えたのはわかった。その瞬間だけグラウンドに平和が戻った。そんな平和な場所で僕は眠りたかった。だから僕はそのまま倒れた。そして目も閉じた。

その後、僕の名前を呼ぶ声が何度もはっきりと聞こえた。はつきり聞こえた理由は、僕の意識がはつきりしていたからだ。僕は遠足の前日にワクワクして眠れないときに、無理やり目を閉じるように、眠るふりをした。僕を呼ぶ声の中で、僕はそれに応えることなく、眠り続けた。しばらくすると、救急車のサイレンが聞こえ、僕はそれに乗せられた。

救急車の中では、母親が僕の手を握って、名前を呼んだ。

僕は目を開けて言った。

「悪いけど野球やめるよ」

その土地の慣習に適合できないゆえ、野球をやめたのか、デッドボールを受けボールが怖くなったので野球を

やめたのか。母親はわかっていたと思うが、僕がデッドボールを受けたという事実は間違いないし、ボールが怖いという主張を否定できないので、母親は退部を許可することしかできなかった。

友人の彼とは進学先の中学が偶然同じだった。彼も中学で野球をやるつもりはなかったらしく、最初に部活動体験に行ったテニス部に一緒に入部した。

アンハッピーインフエクシオン Unhappy Infection

私はどうしようもないくらいに視野の狭い女を知っている。その女に初めて会ったのは、高校入学時の最初の登校日だった。

「初めまして。よろしく」

その女は、私の隣の席だった。彼女に声をかけられた私は、無言で頭を振って挨拶した。私と彼女はそれから最初の席替えがある三ヶ月あまり、隣の席でホームルームや授業時間を過ごしたが、交わした会話は数えるほどだったかもしれない。というのも、私は当時無口な女で、休み時間は机に突っ伏すか中学校が同じだった隣のクラス的美沙と廊下で話すことを主な習慣にしていた。一方でその女は、クラスの割りかし可愛い女が集まった四人グループの構成員として学校生活を送っていた。したがって、互いの机椅子がある学習場は近かったけれども、休み時間を消費する場所は全く別であり、間も無く行われた最初の席替えで、居住的、近所関係も解消となった。

私の高校はひと学年二クラスしかない小規模な私立高校だった。それゆえ毎年クラス替えはあったが、新学年になって教室に入っても、必ず半分は馴染みのある顔が並んでいた。だから仲の良い友人同士が連続で同じクラスになることは、珍しくなかった。

高校二年に進級した私はまたも最初の登校日でその女に声をかけられた。

「秋葉さん。今年もよろしく」

また彼女が隣の席だった。昨年同様に頭を縦に振って、

今回は「よろしく」と声もつけて応答した。彼女は荷物を机に置くと窓際の方に行き、高校一年時に結成された仲良しグループの輪に入り（四人とも同じクラスになったようだ）、新年度の最初の会議を始めた。

私はいくと、この年は美沙と同じクラスになったので、美沙が机に突っ伏していた私を叩いて起こした。

その年も昨年のリメイクのように、その女と私の関係は変化しなかった。例によって三ヶ月ほどで席は離れた。昨年と変わったことは、美沙と私の会話の場所が廊下から教室内へ変わったことだけだ。冬の廊下は寒かったので、休み時間も教室に滞在できるという点に幸せを感じた。

また季節が変わり、高校三年生に進級した。美沙とはまた別のクラスになった。しかしその女の声は今年も変わらず聞こえた。

「よろしく」

隣の席に例の女が荷物を置く。新学年時の席の並びを出席番号順にこだわる限り、この現象は永遠に起こりうるのだと思った。もしくは出席番号というものが苗字の頭文字のあいとお順によって決定される限り。

例のごとく、机に荷物を置くと新年度の仲良しグループ定例会に彼女は向かった、

ある時期から、休み時間に今まで感じなかった彼女の気配を隣に感じるようになった。その年のゴールデンウィーク前ごろだろうか。以前ならや休み時間の毎に教室の窓際の席で彼女たちの集会が行われていたはずだが、ついに閉会を迎えたのだろうか。いや、集会は通常通り行われているようだった。窓際にはいつも通り、仲良しグループ四人の影が見えた。だが、例の彼女は私のとな

りの席に座っていた。

仲良しグループの構成員は入れ替わっていたのだ。四人グループには、見慣れない顔の女が一人いて、女はこっちの方を見て楽しそうに笑っていた。

ゴールデンウィーク明けに、修学旅行で京都に行った。新幹線では四人で仲良く座る例のグループの姿が目立っていた。彼女たちは修学旅行の三日間ずっと一緒にいた。京都観光も、宿泊先の旅館でも、彼女たちははずっと一緒だった。

ぱっと見て、楽しそうな感じ。

わかりやすい楽しさ。

わかりやすさというのは大事なことだ。

見本のような楽しさ。

そんなわかりやすさを日々体験する彼女に、羨ましいと思ったこともあった。

わかりやすい楽しさを失った彼女は、わかりやすく不幸だった。そして、五月末の月曜日の朝、彼女の血塗れの体が校舎の前で発見された。

あーあ、死んじゃった。

男だったらお前の可愛い顔見て恋心を抱き近づくかもしれないが、同性の私は頼りないお前と友好関係を築いたところで何の得もしない。お前みたいな弱者を傍らに据えることで、自分の自尊心を保つ効用は期待できるかもしれないが、私はそんな真似をせずとも精神を安定させる方法を知っている。もつという、精神安定の努力をせずとも、先天的に両親から受け継いだ性格やら考え方ゆえに精神が安定しやすい性質を持っているのを知っ

ている。

ねえ、仲の良い友人と過ごすことがこの世の幸福のすべてなのかい？ バカなのか？ なぜ目先の状況しか見ることができないのかな？ なんて仲間外れが自殺を掻き立てる十分な材料になってしまふのかな？ ほんの一年もすれば、私たちは大学進学をするよね？そしたら、どちらにせよ仲良しグループも解散だよ？それに高校生三年生なら、休み時間に仲良しグループの輪に入らない生徒としての真つ当な理由があるよね？「受験勉強をしなければいけない」という、大学進学率90%を超える日本国の高校生なら思いつくであろう適切な言い訳を、お前は発見することができなかったの？ うちの学校に限ったら、大学進学率七年連続100%だよ？ お前はこの学校に通いながらそれをしない、意外や意外超激レアな生徒だったの？

お前の無能の程度を知ったら、私も助けようとしたよ。気がつかなくてごめんなさい。

五月の学校は美術の授業で絵を描くのに、絶好の場所だね。そんな学校の一角をあんたの血で汚しちゃあいけないよ。

私ねえ、アクリル絵を描くときは必ず修正ペンを使うんだ。絵をちよつと修正したい時なんかはね、すごい便利なんだよ。

私の右手には通常の文具店には売っていないような巨大な修正ペンが出現していた。女子生徒の血液が染みたアスファルトに修正ペンのインクが上塗りされ、やがて綺麗な顔の少女が横向きに寝そべっている絵が浮かび上がった。

インフォメーションアンドコミュニケーション Information and Communication

若ければ若いほど、くうだらしない理由で身を投げる。幸せだった人間が、不幸な人間を観察して、不幸を感染させられることもあるんだよ。しかし今回の感染は私の身にさほど深刻な打撃を与えないようだ。なぜなら、感染源と被感染者の関係性が物理的距離の近さによって作られていたからだ。本当に深刻なのは精神的距離が近い人物が感染源であった場合である。

洪谷有希子は××町三丁目
の住宅街を歩いて
いる……

「生田さん、ういっす」

令和大学世田谷キャンパスの部室棟にある四文武士の部室のドアを駿河リョウが開けた。

令和大学は一、二年生は世田谷キャンパス、三、四年生は神田キャンパスと校舎が分かれている。故に、世田谷キャンパスの部室には基本的に一、二年生しかいない。一年生の駿河と二年生の俺は、平日の昼休みのほとんどをこの部室で過ごしていた。

駿河がソファにリュックを投げる。

「生田さあん。まだOLの彼女から返信こないんすか」

俺は昼飯のカップヌードルをすすりながら言った。

「もう五日もこないねえ」

「自然消滅ってやつっすか」

駿河はソファに腰掛けた。

「自然か？ 自然で言うのは徐々に会う回数を減らしたり、メッセージの返信速度を遅くしたりするもんじゃあないか」

「じゃあ、不自然消滅っすね」

俺はスープに浮いている、カップヌードルの具を一個ずつ、つまんで食べた。

「でも、生田さんも彼女のこと何も知らなすぎですよ。彼女のメアドも電話番号も住所も知らないでしょ。」

駿河もコンビニ二袋から弁当を取り出した。

「これがLINEの罠か」

少し考えて、俺はつぶやいた。

「と……？」

「LINEのようなSNSのおかげで簡単に連絡を取れるようになったけど、その一つの連絡手段に依存しすぎて、いざLINEが機能しなくなった時に、連絡する別の手段がない」

「まあ確かに、このアプリ一つでメッセージも、通話もできますからね。電話番号もメアドも必要ないっちゃないですね」

「もちろん、仮に電話番号やメアドを知ってても、返事が返ってくる保証はないんだが」

「そうっすよ、生田さん単に嫌われたたけじゃないすか？」

駿河がからかうように言った。

「でもよ、二週間前に舞浜ランド行ったし、LINEも毎日のようにしてたんだよ。急すぎないか？」

駿河は弁当を頬張りながら、そうっすねーと適当な返事をした。

「……駿河、今日何限まである？」

「俺は四限終わりですわね」

「ちよつと、探偵のバイトをお願いしたい」

「いいっすよ、彼女探しですわね。面白そう」

「じゃあ、授業終わったら、令大前駅に集合で頼む」

「オツケっす！ 時給千五百円、交通費別途支給でお願います！」

放課後、俺と駿河は南千住駅にいた。俺は彼女の電話番号もメアドも住所も知らないが、彼女の家の最寄り駅だけは知っていた。

「それじゃ、もし見つけたら教えてくれ」

「見つけたらって、彼女さんの顔わかんないすよ」

その後駿河に彼女の写真を見せ、東口と西口の改札に分かれて見張った。

何千という人が俺の目の前を交差していった。人はすぐく似ている。男の社会人と男の社会人は似ている。なぜなら両方スーツを着ているからだ。でももつと似ているのは同じ学校に通う学生と学生だ。なぜなら彼らは同じ制服を着ているからだ。女の社会人と女の社会人は、それらと比べると似ていない。スーツを着なくてもいい

慣習が日本社会にあるからだ。携帯が鳴った。

「生田さん。それっぽい人いました！」

走って駿河のいる西口に行くと、駿河が手を振っていた。駿河が指差す方向には、駿河に見せた写真と同じジャケットを着た女が歩いていた。間違いなく彼女だった。

俺は彼女に追いつき、彼女の名を呼んだ。立ち止まった彼女は驚いた様子だった。

「……ごめん、しばらく会えない」

彼女の言葉を聞いて、彼女が故意的に連絡を絶つてたことを理解した。

彼女は足早に歩き始めた。

「なんで？」

俺は彼女の手首を掴んだ。

「ごめん」

「理由くらい教えてよ」

彼女の手は冷たかった。そして彼女の手は震えていた……なぜだろう。

「……生田さん？」

駿河の声でハツとした。彼女の手を離してしまった俺は一生懸命理由を探していた。既に彼女の姿は帰宅する人々の群れに溶けていた。俺の手には彼女の震える手の感覚だけがずっと残っていた。

翌日、四文文士の部室にはやつぱり俺と駿河だけがいた。

「どうせ浮気っすよ」

駿河が言った。俺もそう思う。社会人の女にとって、俺みたいな学生が本気の恋愛対象であるわけないか。そう言い聞かせて、俺は彼女のことを忘れることにした。サークルで出す文芸誌の作品提出締め切りが来月なので、俺は執筆のためノートパソコンを開いた……

生田透は令和大学世田
谷キャンパスの部室で
カップラーメンを食べ
ている。駿河リヨウが
部室のドアを開ける。
駿河リヨウはソファに
リュックを投げ……

なんだこれ！？ 俺にはこんな文を書き起こした記憶はない。俺のパソコンには昨日起こった出来事が詳細に書き起こされていた。スクロールすると前日、前々日と時間を遡れた。

その後は、隣で驚いた顔をした駿河が全て教えてくれた。まず、この書き起こす能力がトウールという能力であることがわかった。また駿河もトウールを使うこと、駿河の高校の文芸部の後輩にも、トウールを使える女がいることを聞いた。トウールは人それぞれ能力が違ったりしい。そして、俺は能力を試しているうちに、俺の彼女、渋谷有希子が六日前に男にレイプされていた事実を知った。会社の飲み会後、彼女の自宅前で待ち伏せしていた元交際相手に襲われたようだった。

俺はそこから一ヶ月、部室にこもって黙々と文芸誌にのせる作品の執筆をした。その間彼女から連絡は来なかった。

春学期の最後の定期試験が終わった日の夜、自分のトウールに記録されていた情報を頼りに、南千住の彼女の家まで行った。しかし、そこにはもう誰も住んでいなかった。

俺はもっと、価値観が合わないとか、性格の不一致とか、セックスの相性が悪いとか、他に好きな人ができたとか、転勤で遠くに引越すことになったとか、浮気されたとか、そういう理由で彼女と別れたかった。